

元版『分類補註李太白詩』と蕭士贇

芳村弘道

はじめに

李白の詩に初めて注したのは、普通、南宋の楊齊賢と看做されている。¹齊賢、字子見は、寧遠（湖南省零陵地區寧遠縣）の人、慶元五年（一九九）の進士で、制科に應じて第一に中り、賢良方正に擧げられ、通直郎になったという以外、²経歴が定かでない。残念ながらその李詩注本は現存せず、³書名、巻数さえ不明である。ただし、蜀の左綿（四川省綿陽市附近）の刊本があり、内容は「博にして約すること能はざる」もので、甚だしい誤りもあつたといわれている（蕭士贇『分類補註李太白詩』序例）。

ついで元初の蕭士贇、字粹可が、楊注の譌誤を削って佳處を留め、その補をなし、賦にも箋解を加えて『分類補註李太白詩』二十五巻を撰した。これが李白作品の傳存最古の注釋書である。本書は明末に至るまで唯一の李白全詩注として貴ばれていた。當然、四庫全書もこれを收め、提要（總目卷一四九）に「註中多く故實を徵引し、兼ねて意義に及ぶ。卷帙浩博なれば、失無きこと能はず」とその缺點を指摘するものの、「然れども其の大致は詳贖にして檢閲に資するに足る」と評價している。

士贇の後、李詩全首に注するものは絶えてなかつたが、ようやく明末になって胡震亨が『李詩通』二十一巻を著わした。清に入って乾隆中には、王琦が「太白の功臣」（齊召南序）との高評を得た『李太白文集輯註』三十六巻（初刻本三十二巻）を世に問うた。王琦本は、楊・蕭二家と胡震亨の成果を吸収して補訂を行い、初めて文に注し、有益な附録をも備えたもので、李白集注釋の集大成と目された。以降、李白研究に絶對的な權威を誇り、補註本の地位を奪い、王琦本一尊の狀況が久しく續いた。

ところが、近年、補註本再評價の聲が高く、「李白の詩については、この宋元の舊注の方が、清の王琦の新注よりもまさるとは、定評である」（吉川幸次郎「汲古書院版和刻漢籍のために」全集第三巻）と推奨されるに至っている。ただ遺憾なことに、王琦より今日までの多くの學者は、一部節略のある本を原姿が失われていないものと信じて利用している。この誤認を糾そうとするのが小論の目的の一つである。

いま一つ採り上げたいのは、蕭士贇がいかなる態度で本書を成したのかという問題である。彼の父立之は詩人として聞えた人であった。士贇はその教えを受け、晩年の父とともに宋末の争亂をくぐり、元になつては宋の遺民の道をとつた。士贇の補註は、宋末元初という特異

な時代と密接な關連があるように思われる。以上の二點について、元版を用い、補註本の原姿に立ち返つて考察を進めたい。

一 原本系と刪節本系

補註本には元の至元辛卯（二一八年、一二九一）に記された蕭士贊の「序例」が冠せられている。それに「註成りて棄置するに忍びず、諸を稟者に刻せしむ」とあつて、この時、完成を見た本書を上木する旨が述べられている。しかし、現存最古本はそれより約二十年後の至大三年（一三二〇）建安余志安動有書堂版である。以降、明代前期まで、至大刊本やその後の版本に基づく補刻本、覆刻本、重刊本が多種梓行せられた。至大版及びこれに従つた明代前期までの諸版を、いま原本系と稱することにしたい。

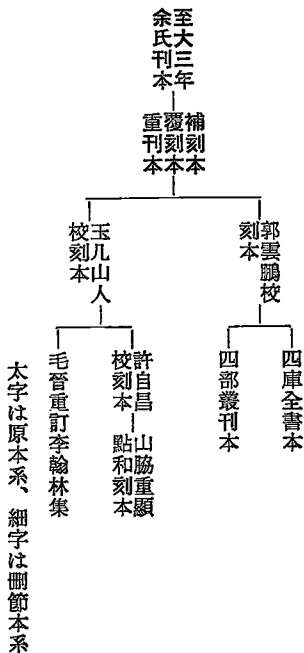
明代後期に至つて原本系に刪節を加えた本が現われた。その最初は嘉靖二十二年（一五四三）の郭雲鵬校刻本である（以下、郭本と略稱す）。他の補註本と異なつて文五卷を編し、合わせて三十卷としている。郭本は四部叢刊に影印され流布するが、注文を甚だしく刪去しており、補註本としての利用價値は全くないといつてよい。ただし、卷二「古風」に明の徐禎卿の評や、まま無署名の注（郭氏の手になるか）を加える點はやや参考になる。なお四庫全書はこの本を採つてゐる。

郭本に後れること三年、嘉靖二十五年（一五四六）に玉几山人（曹道）の校刻本が出された（以下、玉本と略稱す）。刪略は、郭本が全卷に互つて施すのに對し、玉本の場合、卷六から卷八と卷十から卷十七の部分には行われておらず、全二十五卷のうち半分弱の範圍でなされてゐる。元版の魯魚の誤りを比較的よく訂正しており、輕視できない版本である。これを祖として萬曆三十年（一六〇二）ごろに許自昌の校刻本

が出版された（以下、許本と略稱す）。許本は山脇重顯點の和刻本の版下となり、近年、影印も行われ、從來最も利用された版種である。また明末の毛晉が重訂した『李翰林集』も玉本に連なつてゐる（以下、毛本と略稱す）。毛本はかつて王琦が入手できなかった悔しさを跋に記した稀觀本であつたが、幸にも我々は近ごろ影印の『全唐詩稿本』（第一一〜一四冊）中に見ることが出来る。以下、玉本をもつて許本・毛本等の玉本系諸本の總稱とする。

上述のように補註本は、至大三年刊本を初めとする原本系と、明代後期に現われた刪節本系に二大別することができ、刪節本はさらに郭本と玉本とに分けられるのである。以上のまとめとして左に諸本の系統の大概を圖示しておく。なお、原本系の版種や刪節本の刪注の實態等の詳細は、拙稿「元版系統の『分類補註李太白詩』について」（一九九〇年「學林」第十四・十五號 白川靜博士奉壽記念論集）を参照されたい。

分類補註李太白詩諸本系統圖



二 原本系と玉本との混同

『分類補註李太白詩』は、明代前期まで原本系が繰り返し印行されてきたが、刪節本、特に玉本と許本が現われるや、『集千家註杜工部詩集』との合刻が受け入れられたこともあってか、兩本が盛行し、原本系は影を潜めてしまった。これがため、玉本と許本の刪節本系が原本系であるかのように思われるようになり、遂に清の王琦さえ兩者を混同し、「舊註の原本に依つて刊する者有り。玉凡山人本と爲し、長洲許玄祐本と爲す」（王琦本自跋）と述べる始末となった。

王琦は卷二「古風」其五十一の「虎口何婉嬾」の句において、蕭士贇注を次に引いている。

蕭士贇曰、虎口事、如史記秦二世拜叔孫通爲博士、通曰、我幾不脫於虎口之類^③、謂比干以諫死、是陷於虎口、何所爲而婉嬾如是哉、詩云、婉兮嬾兮、註曰、皆顧慕貌、陸機詩、婉嬾崑山陰、註曰、婉嬾、存思貌（郭本無此注）

- ①元版・玉本「諸生曰、先生何言之諛也」の十字あり。②元版・玉本「公不知也」の四字あり。③元版・玉本「此」字あり。
- ④元版「潘尼詩、婉嬾二宮、徘徊殿闈」の十一字あり。玉本なし。

この引用中、注記を施した部分のうち①②③は王琦が意をもって省略したと考えられるが、④については、もし王琦所引のままであれば、『詩經』の注であるとの誤解を與える。ところが、これは『文選』卷二四の潘尼「贈陸機出爲吳王郎中令」詩の呂向注を引いたもので、元版はまさしく潘尼の詩句を引用したうえで、「註曰」と續ける。玉本がこの引用句を削ってしまった粗忽は論外ながら、王琦もこれに追

随したという事例こそは、自跋に記すごとく、彼が玉本と許本を原本に忠實に従った版本と誤認していた一證左とすることができ。

王琦の輯註以降、久しく本格的な李白集の注釋書は著わされることがなかったが、ようやく中國では一九八〇年に瞿蛻園・朱金城合撰の『李白集校注』（上海古籍出版社）が發行せられた。諸本を博搜して校注をなしたと謳うが、しかし、これにも王琦同様の誤りが見受けられる。「凡例」では校本の一つに「蕭本」と略稱して、元刊本を用いたと明記しているにもかかわらず、實際には元版を利用したと思われる簡處が散見するのである。二、三その種の例を左に指摘しておく。

(一)「松柏本孤直」校(卷二「古風」其十一)

〔本孤直〕本、蕭本作峯^①。

(二)「殊非遠別時」校(卷一八「送陸判官往麗谿峽」)

〔遠〕蕭本作還、誤。

(三)「空留錦字表心素」校(卷二五「寄遠」其八)

〔表心〕表、蕭本作素、誤。

- ①元版・玉本・毛本・郭本「本」に作り誤らず。許本「峯」に誤る。
- ②元版・玉本・郭本「遠」に作り誤らず。許本・毛本「還」に誤る。
- ③元版・玉本・毛本・郭本「表」に作り誤らず。許本「素」に誤る。

右の(一)～(三)は蕭本の異文を校勘したものであるが、注記したようにいづれも元版には該當せず、むしろ許本に一致している。ゆえに校注は許本と稱して用いたのではないかという疑いを懐く。

また校注の卷二「古風」其十四には、「評箋」として蕭注が引かれている。玉本はその首尾に刪節があるためであろう、郭本に依據した

旨、引用の末に注記を加えている。なるほど郭本は玉本の刪節部分を存してはいるが、元版の蕭注は校注所引に止まらず、なおも「此詩雖微而實顯、其深得風之體敷」の十四字が續いている。後述することく、蕭士贇の注釋の一特色として、李詩が『詩經』國風の「寄興」の正聲を得ていることを明らかにしようとした點が擧げられるが、「古風」其十四においても、そうした見解を示していたことがこの十四字によつて分かる。校注が正しく元版を用いておれば、無用な注記を要せず、かつ士贇の注釋の眞意も傳えられたはずであつた。不必要な注記は卷四「山人歡酒」の評箋にも見られる。引用した蕭注中の人名を訂して、「妃之兄薛輔、當作太子妃之兄薛鏞」と注した部分も、元版は「薛鏞」と作つて誤らない（玉本は「薛鏞」、郭本は「薛輔」に誤る）。このような不備は、校注が原本系と玉本とを同一視した誤りによつて生じたものであろう。「校注」と銘うつものの、校勘においてこの他にも誤謬遺漏が目立つ點は、本書が勞作であるだけに惜しまれる。

では、近年のわが國における状況はいかがであらうか。花房英樹編『李白歌詩索引』の「資料表序説」は、李白集の書誌を知るうえで必ず参考にしなくてはならない文獻として貴ばれている。これには流布性を考慮して補註本の代表に許本が選ばれ、また郭本も採り上げられている。しかし、兩本は繁簡あるにしろ、刪節本系に屬するものであるから、やはり補註本には、あえて流布のいかんを問はず、原本系も採り上げることが望ましかつたであらう。なお、許本の解説で「この蕭氏分類補註本に屬するものに、安正堂本・玉几山人本・朝鮮本等があるが、刪注のことは許本と相似している」と記されているが、明正徳十五年（庚辰、一五二〇）建陽劉宗器安正堂刊本は、版式こそ異なれ、刪略のない原本系に屬するので、この點、花房氏にも原本系と玉本と

をいささか混同されることがあつたのではないかと思われる。

『李白歌詩索引』の「資料表序説」が補註本として許本と郭本とを採り上げたのに従い、青木正兒著『李白』（集英社、漢詩大系）の凡例と武部利男著『李白』（筑摩書房、世界古典文學全集）の解説には、補註本はこの兩種に分かれることが説かれている。前者に「許氏の校本には兩家の註が完備している」という記述と、後者に「分類補註には二つの系統がある。一つは明の許自昌が校刻した本で、元の至大三年（三三〇）の刊本がわが前田尊經閣文庫に藏せられるほか、重刊本もあり、明代にはしばしば見られたという」と述べる記載とは、ともに刪節本系の許本と原本系とを同一視した誤りを犯している。

このように日本、中國ともに元來の補註本が正しく利用されていないのは、原本系の重刊が久しく行われず、一般には目暗しえなくなつてしまつたからである。

三 蕭士贇の「序例」

以上指摘した通り、玉本系諸本の中で特に通行する許本が原本であるかのように誤つて信ぜられ、楊・蕭二家の注を見る際、この本が多く利用されてきた。しかし、刪節本の許本に據つていては、補註本の眞價に觸れることは十分にはできないのである。蕭士贇が「其の善なる者を選んで之を存し」（士贇「序例」）、補註本のみに傳えられた楊齊賢の注には、これといった特色が窺われない。補註本の眞價とは、蕭士贇の獨特な注釋態度にあるといつてよからう。そこで次に、士贇がいかなる點に留意して箋釋したかについて、元版に基づき考えてみたい。

唐詩大家、數李杜爲稱首、古今註杜詩者、號千家、註李詩者曾不

一二見、非詩家一欠事歟、僕自弱冠知誦太白詩、時習學子業、雖好之未暇究也、厥後乃得專意於此間、趨庭以求聞所未聞、或從師以蘄解所未解、眞思遐想、章究其意之所寓、旁搜遠引、句考其字之所原、若夫義之顯者、概不贅演、或疑其贗作、則移置卷末、以俟具眼者自擇焉、此其例也

右の文は本書に冠せられた蕭士贇「序例」の前三分の一ほどの部分である。士贇は、杜詩の注が千家と號するくらい多いのに比べて李詩の注がなきに等しい状況を、「詩家の一欠事に非ざるか」と憂えた。

そして、それが注釋の筆を執った動機であることを明らかにし、父や師の教えを受けつつ箋釋を進めたという。以下には注釋の要點として、(一)「章ごと」に其の意の寓する所を究む「すなわち「寓意の究明」、(二)「句ごと」に其の字の原づく所を考ふ「すなわち「典故の博引」、(三)「其の贗作を疑ふこと或れば、則ち移して卷末に置く」すなわち「贗作の辨別」という三項目を擧げている。續く三分の一ほどには、

一日得巴陵李粹甫家藏左綿所刊春陵楊君齊賢子見註本讀之、惜其博而不能約、至取唐廣德以後事、及宋儒記錄詩詞爲祖、甚而併杜註內僞作蘇東坡箋事、已經益守郭知達刪去者亦引用焉、因取其本類此者爲之節文、擇其善者存之、註所未盡者、以予所知附其後、混爲一註、全集有賦八篇、子見本無註、此則併註之、標其目曰分類補註李太白集

とあり、上述の要點に加えて、四「楊注の善を存してその補をなす」、(五)「賦にも注す」、ということ擧げ、書名を「分類補註李太白集」とするといっている。次にはこれら注釋の要點について具體的に見てみたい。

まず「寓意の究明」に關して四例擧げてみる。

(a) 卷二「古風」其十八篇末下

〔蕭注〕……此詩之作、其有所諷歟(郭本刪二句)、大意蓋謂、天津橋水閱人亦多矣、富與貴者、自謂可以長保、而不知退、安知其無李斯・石崇之禍乎、何如范蠡之勇退爲高也、今以唐史攷之、謾舉最顯者而言、如國忠・毛仲輩、後皆遭難、則太白此詩亦可謂有先見之明者矣(今以以下、玉本・郭本刪)

これは、勇退しようともせず、永遠に富貴を享受できると決めこんでいる者への批判を詠んだと解する「古風」其十八の注である。士贇は「唐史」に照らして考え、この詩が權勢を縱にし、後に難に遭った楊國忠と王毛仲の末路を豫見する内容をもつと指摘している。ただし、王毛仲は開元十九年(七三一)に炎方へ貶せられる途中、縊殺を受けており、詹鏐著『李白詩文繫年』が本詩を開元二十三年(七三五)作とするのを信ずれば、蕭注の説は成り立たないであろう。また楊國忠は天寶期に權勢を振った人物であるから、開元前半の王毛仲との併擧は當を得ていない。「謾りに擧ぐ」と斷わっているが、この擧例には甚だ無理がある。

(b) 同「古風」其十九篇末下

〔蕭注〕……按唐史、至德間、府庫無蓄積、朝廷專以官餽賞功、諸將出軍、皆給空名告身、(中略)名器之濫、至是而極焉(以上、玉本・郭本刪之、安史亂離之際、朝廷借回紇兵、復兩京、故曰茫茫走胡兵、復用官餽賞功、不分流品、故曰豺狼盡冠纓也、太白此詩、似乎紀實之作、豈祿山入洛陽之時、太白適在雲臺觀乎(太白此詩以下、郭本刪)

(b)は篇末に「俯視洛陽川、茫茫走胡兵、流血塗野草、豺狼盡冠纓」とあり、安祿山の亂を詠じたと解釋する「古風」其十九からの例であ

る。生々しい時代の動きを描いた作品に近いとして、士贇はこの詩を「紀實の作に似たり」ととらえた。史實に即して詩意を解こうとする態度は(a)(b)に共通しており、他にも「唐史を以て考ふるに」という例は少なくない。

(c) 卷四「妾薄命」篇末下

〔蕭注〕……太白之詩、其旨出於國風、往往寄興深遠、欲言時事、則借古喻今、此詩雖言漢武之事、而意則實在於明皇皇后也、……

(各本不刪)

(c)は漢の武帝の故事を用い、玄宗の王皇后廢位に批判の意を寓したと解く「妾薄命」の例である。蕭注が同じ時事を扱ったと看做す他の詩に、卷四「白頭吟」・卷二五「長門怨」があり、「古風」其二も楊注に従い同様に解釋している。しかし、『李白集校注』が「古風」其二や「妾薄命」で辨ずるところ、當時、李白は二十歳を過ぎたばかりで、なお遠く蜀にあり、この内廷の事件を知る由もなく、また關心もなかったと推測できるので、蕭注の解釋は附會に失したといえよう。

(d) 卷五「清平調詞」其三

〔蕭注〕太白詩、用意深遠、非洞悟三百篇之旨趣者、未易窺其藩籬、晦庵所謂聖於詩者是也、清平樂詞、宮中行樂詞、其中數首、全得國風諷諫之體、(中略)是時明皇有聲色之惑、多不視朝、故因及之也、言在於此、意在於彼、正得諷諫之體、太白纔得近君、當時人所難言者、即寓諷諫之意於詩內、使明皇因詩而有悟、其社稷蒼生、庶有瘳乎、豈曰小補之哉(各本不刪)

(d)では「清平調詞」や「宮中行樂詞」の中に、玄宗が聲色に溺れ、政治を顧みないことを諷諫したという寓意をもつ詩篇があると解している。(c)(d)いずれも「詩經」の「寄興」「諷諫」「譏諫」の體を得た作

品であるとの指摘は、後述することく、杜甫に對抗して李白を再評價しようとした蕭士贇の考えが如實に反映したものである。ただし、士贇の寓意解明は、(a)や(c)のように往々、牽強附會に陥った場合があり、よく検討する必要がある。

次に第二の要點「典故の博引」について、三例を擧げて述べてみたい。

(a) 卷二五「長門怨」其一「天廻北斗挂西樓、金屋無人螢火流、月光欲到長門殿、別作深宮一段愁」

〔蕭注〕詩云、熠熠宵行、注曰、熠熠、燐也、燐、螢火也(以上、郭本刪之、箋(郭本作詩箋)云、此物(郭本作螢火)、家無人則然、令人感思、室中久無人、故有此物、是不足畏、乃可以爲憂思(郭本刪思字、詩人下字、必有來處、則無人字、非泛然而言者也(玉本不刪。「詩人下字」以下、郭本刪)

(a)では「長門怨」の第二句が「詩經」(豳風)「東山」篇の傳・箋に基づく表現であることを注し、そして「詩人字を下すに、必ず來處有り、云々」と附言している。この「詩人字を下すに、必ず來處有り」という見解は、蕭士贇が典故の博引に力を盡くした理由を明らかにしたものである。

(b) 卷二「古風」其六 第九・一〇句「蟣蝨生虎鬚、心魂逐旌旆」

〔蕭注〕淮南子記(當作汜)論訓、甲冑生蟣蝨、燕雀處帷幕、而兵不休息、西漢楊雄傳、擬生蟣蝨、介冑被沾汗、東漢朱浮傳、甲冑生蟣蝨、弓弩不得馳、東漢輿服志、武冠、虎賁、羽林、皆鷄冠、注云、鷄似雉、以其鬪死不止、故用其尾飾武臣首、張平子東都賦、虎夫戴鷄、左傳、分康叔以旌旆、又樂祈(當作祓)曰、心之精爽、是謂魂魄、江淹詩、百年信在苒、何用苦心魂、韻注、旗

曲柄曰旂（玉本・郭本刪）

この蕭注は玉本・郭本では楊注の徵引で足れりとして、すべて刪去せられている。土贊の箋釋の綿密さがよく窺えるので、長文ながら、あえて全文を引用してみた。

(c)同「古風」其十八 末二句「何如鷓夷子、散髮棹扁舟」

〔蕭注〕鍾會遺樂賦、散髮抽簪、永絕一丘、後漢書曰、袁閔散髮絕世、張孟（當作景陽詩、散髮歸海隅（玉本刪張詩。郭本無此注）

右の例は「散髮」という語彙に用例を三つ擧げたものであるが、その入念さがかえって刪節の對象となっている。

ところで、蕭士贊は朱子の「李太白終始學選詩、所以好」（『朱子語類』卷一四〇・論文下）という言葉を念頭に置いてか、『文選』から用例を丹念に引いているようである。この點とりわけ李白詩研究に有益であると思われる。そのためには、やはり原本系の補註本を参考にしなければならぬであろう。

要點の第三は「贗作の辨別」であった。その對象になった作品は、卷六「少年行」「猛虎行」「去婦詞」、卷七「金陵歌送別范宣」「笑歌行」「悲歌行」、卷八「歷陽壯士勳將軍名思齊歌」「草書歌行」、卷九「上李邕」、卷一一「贈張相鎬」二首「聞謝楊兒吟猛虎詞因此有贈」「宿清溪主人」「繫尋陽上崔相換」三首「巴陵贈賈舍人」、卷一九「答王十二寒夜獨酌有懷」、卷二一「登廣武古戰場懷古」、卷二四「南奔書懷」のすべて二十首である。

土贊の贗作辨別の基準は「登廣武古戰場懷古」詩に「先儒所謂偽贗之作也、何以知其然、曰、以（以上、玉本刪之）詩中語意錯亂、用事無倫理、知之（末二字玉本刪、郭本無蕭注）」と注する通り、主として表現のいかんにある。しかし、その判断は主観的要素が強く、かなり問題を含ん

でおり、現在では彼が贗作と疑った多くが眞作として扱われている。次に「楊注の善を存してその補をなす」という要點の實例をいくつか擧げてみよう。

(a)卷二「古風」其二

第四句下〔楊注〕按唐書、王皇后久無子、而武妃有寵、后不平、顯詆之、遂廢、武妃進册爲惠妃、欲立爲后、潘好禮諫止之、太白詩意似屬乎此、……

篇末下〔蕭注〕……此篇宋西山先生真德秀文章正宗云、按唐書、王皇后久無子、而武妃有寵、后不平、顯詆之、遂廢、武妃進册爲惠妃、欲立爲后、太白詩意似屬乎此、子見之說、實祖於西山、土贊今演之曰（以上、玉本・郭本刪之、蟾蜍薄太清、月爲之蝕、……

(b)同「古風」其三十四 第七句「天地皆得一」

〔楊注〕老子云、天得一以清、地得一以寧、王侯得一以爲天下貞

〔蕭注〕江淹詩、天地皆得一、名實久相資（玉本・郭本刪）

(c)卷三「天馬歌」第五句「蘭筋權奇走滅沒」

〔楊注〕伯樂曰、天下之馬者、若滅若沒、若亡若失、……

〔蕭注〕列子、伯樂曰、良馬可以筋骨相也、天下之馬、若滅若沒、若亡若失、若此者皆絕塵弭轍（玉本・郭本刪）

(a)の蕭注は楊注の來源を解明したものである。このように楊齊賢はしばしば引據を示さぬ場合があり、土贊はそれを補うことが多い。(b)は蕭注が的確に用例を指摘した例で、(c)は楊注が典據を示さぬばかりか、原文を節略して引くことに對して、土贊が懇切に據證した例である。(a)(c)の場合は重複の嫌いがあるので、削除のやむを得ぬ一面をもつとはいえず、(b)の刪去は全く不當であり、刪節本なるものの杜撰さがここでも見られる。

(d) 卷七「勞勞亭歌」

〔蕭注〕……此詩意乃太白自比於靈運、而又自嘆其才不減彥伯、而無謝尚之見知、獨宿空簾、寄情歸夢、亦可哀矣、子見謂康樂謝靈運、邀袁宏乃謝尚、疑誤者、豈亦一時逐句看詩、不曾將全篇混融而讀邪（玉本不刪。「子見」以下、郭本刪之）

これは楊注の誤りを斥け、士贇が正しい解釋を出した例である。また卷八「永王東巡歌」其一のように、楊注が誤った典故を引いているのを、「今刪去す」と注する例も見られる。

最後に、五番目の要點である賦の注については、「大鵬賦」以下八篇を卷一に置き、詩と同様に詳注を施している。

四 杜甫に對抗しての李白再評價

先に見た通り、蕭士贇は「序例」で、唐詩の二大家でありながら、杜詩の注の夥しさに比べ、李詩の注のあまりの乏しさを「詩家の一欠事」と嘆き、自ら注釋を始めたこと述べていた。さらに「序例」の終り近くには、「箋註者をして是によりて十、百、千ならしめん。杜註と等しからしむれば、願って美ならざるか」といい、この補註を契機に多くの注釋が出現し、杜詩注と頤頤することを期待している。これに據っても、蕭士贇の補註は杜甫詩への對抗意識を強くもつといえるであらう。そして、士贇は以下に擧げることく、注において李白に存在する杜甫的要素を指摘し、李白の再評價を圖っている。

(a) 卷一七「同王昌齡送族弟襄歸桂陽」其一（篇中云、余欲羅浮隱、猶懷明主恩、躊躇紫宮戀、孤負滄洲言）

〔蕭注〕……細味此詩、非一飯不忘君者乎、議者何厚誣太白之不如杜哉（各本不刪）

(b) 卷二〇「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭」其三（篇末云、記得長安還欲笑、不知何處是西天）

〔蕭注〕……此詩雖遊賞之作、然未句隱然有瞻顧宗國、繫心君主之意、其視前輩所評杜甫之詩、一飯不忘君者、夫何慊之有哉（玉本刪、郭本不刪）

(c) 卷二一「登敬亭北二小山余時客逢崔侍御並登此地」（後半云、迴觀指長安、西日落秦關、帝鄉三千里、杳在碧雲間）

〔蕭注〕……按白此詩、其亦身在江海、心在魏闕之意乎、食息不忘君、豈特杜甫爲然、迄今數百載、未有發明之者、惜哉（各本不刪）

(d) 卷八「永王東巡歌」其一（本詩云、永王正月東出師、天子遙分龍虎旗、樓船一擧風波靜、江漢翻爲鴈鷺池）

〔蕭注〕……此詠永王出師、首篇表之以天子遙分龍虎旗者、夫子作春秋書王之意也、太白忠君之心、於此可見、百世之下、未有發明之者、故書于此……（各本不刪）

(a) は忠君精神において李白が杜甫に甚だしく劣るという意見に反論したものである。(b) でも同様に、従來の評價に對抗して李白も忠君愛國の精神を杜甫に劣らず有していると述べている。(c) では、忠君の情は杜甫に限ったことではなく、李白も厚く懐いていたにもかかわらず、それが數百年間不明であったと惜しみ、(d) においては、士贇が初めてその心を明らかにしたと特書している。

(e) 卷五「黃葛篇」

〔蕭注〕……太白此詩、忠厚之意、發於情性、風雅之作也、今世毗蜉輩作詩評、乃謂太白詩全無關於人倫風教、吁、是亦未之思耳（各本不刪）

(f) 卷一六「金鄉送章八之西京」

〔蕭注〕……太白此詩、因別友而動懷君之思、可謂身在江海、心存魏闕者矣、或者謂白詩全無關於人倫風教、其厚誣太白哉（玉本不刪。「或者」以下、郭本刪之）

さらに右の(e)(f)に見られる通り、蕭士贇は、李白の詩が「全く人倫風教に關する無し」と看做す誤った世評に反駁を加え、詩人の真心の厚さと忠君の情の深さを強調している。

先に補註の要點として挙げた「寓意の究明」において言及したごとく、蕭士贇は、社會を批判し、當時の現實を詠じ、時に君主への諷諫の意をこめた李詩の存在を説いていた。これは杜甫詩に見える諷諭性・詩史的性格に對抗した見解といえよう。

士贇が格別に力を注いだ、補註のまたの要點「典故の博引」は、「詩人字を下すに、必ず來處有り」という考えのもとに行われたことをすでに指摘したが、これから連想されるのが、杜甫の詩と併わせて韓愈の文を採り上げた黃庭堅の次の批評である。

自作語最難、老杜作詩、退之作文、無一字無來處、蓋後人讀書少、故謂韓杜自作此語耳（『豫章黃先生文集』卷一九「答洪駒父書」其二）

この評語中、「一字として來處無きは無し」という言葉は特に有名である。士贇は、李白が杜甫同様、先人の詩文に對して研究を積み重ね、自己の文學の資としていたことを明らかにしたいため、「冗泛」（王琦本自跋）とまで評されるほどに「來處」を旁搜遠引したのであろう。

五 蕭氏父子と李白の忠君愛國

蕭士贇が、李白も杜甫に劣らぬ忠君愛國の精神の持ち主であると強調した理由は、杜甫への對抗によって李白を改めて評價しようという

元版『分類補註李太白詩』と蕭士贇

思いだけに止まらないようである。これには士贇が生きた宋末元初の時代背景が大きく關わつていると思われる。

士贇八世の從孫に當る明の蕭敏の「識水厓公詩集拾遺」（四部叢刊續編所收『蕭水厓詩集拾遺』、以下『水厓集』と略稱す）に、

時聖與府君（士贇祖父、號蘭坡）與公（士贇父、立之、一名立等、號水厓）兄弟子姪（原作姓、今改）、三十五人並仕宋、吾宗于斯時號最盛

とあり、南宋に仕えて蕭氏最も盛んな時代が士贇以前三世であった。こうした蕭氏であるから、南宋滅亡の際、報恩のためと漢族の誇りにかけて、宋室に殉じて元朝への抵抗を強く示したのは當然であったといえよう。事實、士贇の父の立之は、左に擧げる『水厓集』卷下の一首に窺えるごとく、自ら勤王の軍を起すために立ち上がったのである。

請兵道中作

八表同昏草露深

西風愁絕不成吟

申包胥有傷時淚

南霽雲無食肉心

日月重光天與子

山河正統古猶今

微生千里間關意

淨洗妖氛待相霖

八表同じく昏くして草露深し

西風 愁絶して吟を成さず

申包胥には有り時を傷む涙

南霽雲には無し肉を食ふ心

日月重光 天子に與へ

山河の正統 古も猶ほ今のごとし

微生 千里 間關の意

妖氛を淨洗せんとして相霖を待つ

この詩の首聯は、天下暗黒の情勢に對する蕭立之の深い憂愁が秋景によって象徴されている。領聯は、秦に使いして兵を乞うた楚の申包胥と、安史の亂中、張巡の命で援軍を求めに赴いた南霽雲とに立之が自らを喩え、滅亡に瀕する宋室への忠節を表わしたものである。頸聯

は、咸淳十年（一二七四）七月、度宗崩御して四歳の恭帝羈が遺詔を奉じ踐阼し、謝太后が朝に臨み、帝位の繼承が何ら變わることなく正統的に行われたことをいうのであろう。尾聯の「相繫」は、七月の長雨の意と解し得る。取るに足らぬ身をもって遙かな道中に出、行く手の險しさが思いやられるが、兵亂の氣を洗い淨めてくれるであろう七月の長雨を待ち望みたい、と詠じ收める。

恭帝即位の年の十二月、天下に勤王の詔が下されたが、これに應ずるものはほとんどなかった。その中にあって、知贛州（江西省贛州市）であった吉州廬陵（同省吉安市）の人、文天祥は任地の豪傑や吉州の兵など衆萬人を結集し、翌年初めに忠義の兵を擧げた。この贛州こそは蕭氏の故地、寧都（同省贛州地區寧都縣）の屬するところであった。

また謝枋得も勤王軍を起したが、これも同じく江西の信州弋陽（同省上饒地區弋陽縣）の人であった。立之には「願我尙堪輸九死、觀公端可愧諸賢」と詠する「讀文山詩」（『水厓集』卷下）があり、彼の詩集には謝枋得が跋を記して「觀其詩、可以知其人」（『水厓集』附載・『壘山集』卷九「蕭水厓先生詩卷跋」）、と述べるという興味深いつながりがある。

「請兵道中作」詩に窺える蕭立之の行動が、兩忠臣の擧兵とどう結びつくのかは詳らかではないが、江西も遂に徳祐元年（至元十二年、一二七五）十一月、元に歸附した。翌年正月には宋の幼主が傳國の璽を奉つて元に降服し、その後、端宗景・帝昺の抵抗が續いたが、至元十六年（一二七九）二月、宋王朝は滅亡するのであった。この年、立之は「己卯秋社」詩（『水厓集』卷下）を詠じた。その後半に「青山有約壘娛老、紅樹無情強作春、好爲麻姑問人世、如今幾見海楊塵」と山間の隱棲にもどつて老を養ひ、滄桑の變に言いしれぬ感慨を覺えていく。また彼は、王朝が元に移るや、南宋が繼承した漢人の傳統をいと

もたやすく棄て去り、胡風に染まる縉紳の無節操に憤り、「東南文物古遺餘、不料冠紳忽棄如、門外逢人作胡跪、官中投牒見番書」（『水厓集』卷下「寄羅澗谷」又和）と詠じている。

この父に蕭士贇が感化を受けなかったはずはなく、「庭を趨りて以て未だ聞かざる所を聞かんことを求め」（士贇「序例」）、補註の業を進めて行つたわけであるから、李白の忠君愛國の精神を特筆した理由は十分に理解できよう。まして次に擧げる『水厓集』卷下の詩から、士贇も勤王軍に投じたと推測できるとなれば、こうした李白の一面に彼がいたく共鳴したのもいよいよ無理からぬことに思われる。

次曾漁磯賀得士贇音問韻

時危多難合驅除 時危多難 合に驅除すべし

安見嬌兒競挽鬚 安んぞ嬌兒の競ひて鬚を挽くを見んや

支厦可能扶緒漢 厦を支へて能く緒漢を扶くべく

暫江猶欲活全吳 江に暫ひて猶ほ全吳を活かさんと欲す

疑從馬革無還壁 疑ふらくは馬革に従ひて壁を還すこと無からんと

忽得蠅頭似串珠 忽ち蠅頭を得るに珠を串するに似たり

君有詩來逾骨肉 君に詩有りて來るは骨肉に逾え

爲君吟罷酒三呼 君が爲に吟じ罷はりて酒三呼す

この詩の題は「曾漁磯（立之の詩友）の士贇の音問を得たるを賀する韻に次す」と訓ぜられる。首聯の下句は、杜甫「北征」詩の「平生所嬌兒、顔色白勝雪、……問事競挽鬚、誰能即臆喝」を用いたもので、この聯は、時局の危機と國家の多難を除き去らねばならない今、愛兒の惡戯を樂しげに見ておられる情況ではないかと思ひ、救國の軍に加わつた息子を立之が送り出したことをいうのであろう。領聯の意はいま一つ明らかでないが、岡村繁博士の御示教に據れば、上句の「支厦」

は、『文中子』事君篇に見える、御史となつて旅立つ芮城府君に王通が言を以て送つた後、「大厦將顛、非一木所支也」といった言葉に基づいている。その阮逸の注には「言隋將顛、非御史可救」という。また「緒漢」の語は漢族の遺緒を守る南宋王朝を指すように思われる。下句は、後に五代十國の吳越の武肅王となる錢鏐が江沙を獨り吞んで天に祈つたところ、陰雲月を蔽い、それに乘じて賊軍を撃破したという『吳越備史』卷一に載せる故事を用いていよう。たとえ一人たりともわが息子ならば、顛覆しようとする南宋王朝を支えることができ、さぞかし戦地の水邊で天に祈つて國を救う活躍を遂げたであろう、と想像したのがこの一聯の意であろうか。頸聯の上句は「馬革裹屍」の故事を用い、息子が戦死したのではなからうかと案じていたことをいい、下句は細字で綴られた息子士贇からの音信を一字千金の思いで讀んだことをいう。尾聯は、士贇の無事の知らせが届き、それを祝う詩を寄越した曾漁磯に厚く感謝して返禮の詩を吟じ終え、喜びの酒を重ねたと詠じたものである。

蕭士贇が父に戦死の心配をかけた勳王軍の抗戦もあえなく終つて宋は滅亡し、蕭氏父子も元朝の時代に生きながらえることとなった。壬午、すなわち宋滅びて三年後の至元十九年（一二八二）には、士贇は父のもとにあつた（『水厓集』卷下「壬午九日、士贇自廣運鎮南雄、歸途過家、士贇・士贇有詩、因用韻」詩。父立之はこの年の元日の所詠に「記前壬午甫能冠、甲子周回有此年」（同「壬午元日試筆、有懷十翁楚山先生兩章奉寄」又）と吟じた。かつて二十歳で壬午の年を迎え、六十年後、再び壬午に巡り合わせたというから、この時、立之は八十歳に達したことが分かる。逆算すると嘉泰三年（一二〇三）の生まれとなるが、卒年は明らかでない。ただし至元辛卯（二十八年、一二九二）の紀年をも

元版『分類補註李太白詩』と蕭士贇

つ士贇「序例」に、「章貢金精山北冰厓後人」との署名があり、その後には「冰厓後人」の印記も見えているので、この年以前に立之が卒していたことは明確である。

士贇が「冰厓後人」を號するのは、詩を善くした父の後繼者をもつて任ずるだけではなく、節義の人の子たることを忘れないためもあつたであろう。『分類補註李太白詩』は立之の亡きあと數年して成つたものであるが、李白の忠君愛國の精神に對するやや過度の稱讚には、宋末元初に節を通して生きた蕭氏父子の投影が見られるのである。

六 李白の不遇感に對する蕭士贇の共感

文學作品の注釋の典型を開いたのは『文選』李善注であるといわれているが、用事の解説に終始した李善の注釋態度と比べると、蕭士贇の補註は、注釋者の感慨を時に表わすという主觀的側面が存在する。それは士贇が李白の不遇感に共鳴した時に萬感をこめて書き加えられている。

例えば卷二「古風」其二十一の注を、

此篇感歎之詩也、高才者知遇之難、卑汚者投合之易、古猶今也、

士贇才而不遭、能不讀其詩而爲之吞聲歎息也歟（玉本不刪、郭本無蕭注）

と結び、士贇は、高才者がかえつて不遇に陥るといふ李白の慨嘆を自らのものとして受けとめ、「古も猶ほ今のごとし」と共感を表わしている。「古風」其三十二の注にも「嗟夫、士有志而不遇於時者、十當作千」載讀之同一悲感也（玉本・郭本並刪）とあり、このほか「古風」其五十六や卷二四「感遇」其二にも同様の感慨が記されている。

また「古風」其五十七では、

猶言在野之賢、望在位之賢汲引同類、以就君祿、而在位者卒無進賢之心、有志而不能自拔者、茫無所歸、惟有嘆息而已（各本不刪）と注し、この詩で李白が訴えんとしたところを解き、續いて、

余因發而明之、以愧當世在位之賢、不能引拔同類者（玉本不刪、郭本刪）

と記している。この注に明らかなように、蕭士贇は、當路の賢者が在野の賢人を見出して推薦することができないでいる現況に強い不満を懷いていた。裏返していえば、彼は知遇を得て拔擢されんことを願っていたとも考えられよう。

王琦の記す蕭士贇の小傳には、「入元隱居不出」という一句がある。士贇傳の基本的資料となる地志の記述にはこのことが見えないけれども、^②既述の蕭氏父子の宋室への忠節を考えれば、王琦のいうところももっともと感ぜられる。後述することく、蕭注は元に入つての撰述と考えられるが、そうすると士贇は、一方では節義を通して元に仕えまいとし、一方では當路者の薦を得ようと願っていたという矛盾を有していたことになる。思うにこの矛盾は、長年の刻苦と修養の末に具わつた才徳學識を發揮したい、という願望を斷ち難かつたゆえに生じたのではなからうか。

士贇は「序例」で「僕弱冠より太白の詩を誦するを知る。時に學子の業を習ひ、之を好むと雖も究むるに暇あらざるなり」といつている。彼の生卒年は不明であるが、南宋末に科擧の勉學に精勵したことは、ほぼこの文から窺えよう。興味ある李白詩研究を措いて、登科に向けて研鑽したにもかかわらず、元に入るや、科擧が廢せられ、蓄積した學問も、磨いた文才も發揮する場を失つてしまつたのであつた。

「序例」に「厥の後乃ち意を此の間に専らにするを得たり」というの

は、再び李白集を取り出し、そのはげ口を李詩注釋に求めたことを語つたものと思われる。先に擧げた「古風」等の注で、蕭士贇が李白の不遇感に觸發されて吐露した感慨は、とりもなおさず自らの身世に對する嘆きでもあつた。そして、王琦に「冗泛踳駁」と評されたり、後には一部が削除される目に遭つた詳贍な注は、彼の學業の證しを後世に遺したいという切實な思いに驅られて成つたものと考えられる。^③蕭士贇の中にも、元朝の漢人知識人の典型を見ることができるといえるのではなからうか。

まとめ

以上の通り小論は、明代後期以降、玉几山人本系統の中で許自昌本が最も行われ、この刪節本が補註本の原姿を保つものと永らく信ぜられ、廣く利用されてきた誤りを指摘し、そして刪節本では十分には窺えない本書の眞價である蕭士贇の特色ある注釋態度について、元版を用いて考察を進めてきた。

蕭士贇には杜甫に對抗して李白を再評價しようという意圖があつた。特に「古風」や樂府といった李白の文學の重要な作品群において、寓意の究明に努め、李白は『詩經』の諷諫の體を得ていると論ずる。また各處で李白が忠君愛國、人倫風教に厚い詩人であつたと説いている。この所論は、儒家の傳統的な文學觀に照らして杜甫が高く評價され、李白が不當に貶しめられていたことを遺憾に思い、李白も儒家の文學觀に沿う要素を杜甫に劣らずもつと強調することによつて、李白を擁護し、その再評價を提言したものであると考えられる。

なお、李白の忠君の情に對しては、過褒の嫌いがあるが、それは蕭士贇が深く教えを受けた父と同じく、勤王の擧に出たほど宋室に節を

通した人であったからでもあることを、父立之の詩に據って明らかにし得たと思う。

士贇は節を守って元に仕えまいとした一方で、不遇をかこつ李白の詩に心打たれては、己の學識才徳を揮える場を願うこともあった。しかし、元朝に入って科擧は廢せられ、雄飛の途はすでに閉ざされた。學才を示すところを見出せず、士大夫として生きる大きな目的を士贇も失ってしまった。そこで深く共感を覺える李白の詩賦にもてる學識のすべてを注ぎ、旁搜遠引の詳細な注解を行うことによつて、その代償を求めたと考えられる。かくして成つたのが『分類補註李太白詩』二十五卷である。ここにも元朝を生きる漢人士大夫が存在したのである。本書は宋末元初という時代が生んだ特色ある李白集の注釋といえよう。

注(1) 王琦本の自跋に「李詩全集之有評、自滄浪嚴氏始也、……其有註、自子見楊氏始」という。ところが、『千頃堂書目』卷三二は「王繪注太白詩」を著録し、「字質夫、濟南人、天會二年進士」と注する。金の太宗の天會二年(一一二四)は楊齊賢の進士登第より七十五年前である。王繪注は佚書ゆえに全首に注したものかは不明ではあるが、これをもつて李詩注釋の嚆矢とすべきであらう。

(2) 王琦本の自跋に「子見名齊賢、永州寧遠人、古春陵城在其地、故稱春陵楊齊賢云、宋慶元五年進士、兩應制試第一、執政以賢良方正薦、授通直郎」とある。『光緒寧遠縣志』卷七之三にも小傳を載せるが、あまり加うるところがない。

(3) 詹鍇「李太白集版本斂錄」(『李白詩論叢』一九五七年第一版、八四年新一版、作家出版社)は、「楊齊賢註本」と標記し、「是書有毛子晉翻刻本、題李翰林集二十五卷、宋楊齊賢註、元蕭士贇補註、崇禎三年刻」(新

元版『分類補註李太白詩』と蕭士贇

一版に據る)と述べている。毛本が補註本であるにもかかわらず、「楊齊賢註本」の翻刻とするのはよろしくない。申風「李集書錄」(『李白學刊』第一輯、一九八九年、上海三聯書店)も毛本を採り上げて「李翰林集二十五卷(宋)楊齊賢注」と記し、齊賢單注本と看做す誤りを犯している。なお、毛本について詹氏は「題名(李翰林集)的三種不同版本」(『文獻』總第三二期、一九八七年、書目文獻出版社)でも言及している。

(4) 小論において「元版」と稱するのは、この至大版の尊經閣文庫所藏初印本を指す。

(5) 小見山春生「李太白詩・杜工部集の玉几山人・許自昌校本について」(『斯道文庫論集』第二〇輯、一九八三年、慶應大學)に詳しい版種の調査報告がなされている。

(6) わが國では京都大學人文科學研究所及び宮内廳書陵部に安正堂本が藏せられている。なお、兩機關の目錄、解題がこれを元版と誤認していることは、拙稿「元版系統の『分類補註李太白詩』について」(『學林』第十四・十五號)において指摘した。

(7) 「唐史」とのみいって典據を示さないが、「府庫無蓄積」より「至是而極焉」までの長文は『通鑑』卷二一九(至德二載五月)の記載を引用したものである。

(8) 蕭士贇の父立之には「開元天寶遺事」に取材して詠じた、「開元天寶雜詠」と總題する「妖嬈」以下七絶十八首の作品群がある(『蕭水崖詩集拾遺』卷中)。一首を除き、各題下に基づく逸事を該書から抄出してゐる。士贇の唐代史に關する造詣の深さは父親譲りであつたようだ。

(9) 「白頭吟」について清の沈德潛『唐詩別裁集』卷六は、「太白詩、固多寄託、然必欲事事牽合、謂此指廢王皇后事、殊支離也」と評す。「長門怨」については、明の梅鼎祚の評に「二首、蕭注以感明皇廢王后作、然此或自沈耳、古宮怨詩、大都自沈」(『李白集校注』引李詩鈔)とある。いずれにも蕭注は附會の説として斥けられている。ただし、士贇は「古

風」其二にのみ「白意若曰（四字、玉本不刪、郭本刪之）夫婦君臣俱人之大倫也、至密近者、莫如夫婦、而且不能保其終、况臣子之疎遠乎、此白之所以感嘆終夕而涕零也」と説き、梅鼎祚の所謂「自況」の意に解している。彼がなぜ他の詩には「自況」の解を適用しないのか理解に困む。「妾薄命」の場合も「時事」を諷するという解釋しか示していないので、ここでは附會の説と考えておく。

(10) 卷四「長干行」其二の題注で士贇は、黃庭堅の「太白集中長干行二篇、妾髮初覆額、眞太白作也、憶妾深閨裏、李益尙書作也、所謂癡妬尙書李十郎者也、詞意亦清麗可喜、亂之太白詩中、亦不甚遠、大儒曾子固判定亦不能別也……（各本不刪）」という説（『漁隱叢話』前集卷五）を引き、これも偽作と看做しているが、其一から切り離して卷末に移すことはしていない。普通、「少年行」「去婦詞」「笑歌行」「悲歌行」の四首は偽作として扱われているが、他は士贇の説が斥けられ、すべて眞作と考えられている（ただし「猛虎行」は意見が分かれ、詹鍈「李詩辨偽」は偽作、「李白詩校注」は眞作とする）。

(11) なお蕭敏は『蕭水厓詩集拾遺』の刊行のみならず、原本系に據って『分類補註李太白詩』を正徳元年（一五〇六）に重刻し、先世の顯彰に努めている。蕭敏版補註本については注(6)掲出の拙稿を参考されたい。

(12) 呉への報復を願う楚の昭王の命を受け、申包胥は秦に使いして師を乞うた。しかし快諾は得られなかった。そこで、庭牆に立って日夜哭し、七日間、飲み物さえ喉に通さずにいたところ、哀公を動かすことに成功して援軍が得られた（『左傳』定公四年）。

(13) 睢陽を守る將士の兵糧が盡き、張巡は南霽雲を遣わし、臨淮の賀蘭進明に救援を請わせた。張巡の成功を恐れる進明はこれに應ぜず、壯士の霽雲を留めようと大宴を開いた。その時、霽雲は涙ながらに「昨出睢陽時、將士不粒食已彌月、今大夫兵不出、而廣設聲樂、義不忍獨享、雖食、弗下咽、今主將之命不達、霽雲請置一指以示信、歸報中丞也」とい

い、指をつめ、ついに食を口にすることなく立ち去った（『新唐書』卷一九二張巡傳）。

(14) 「日月」は、『禮記』昏儀に「故天子之與后、猶日之與月」とあることく、天子と皇后を喩えるが、ここでは「月」を「朝に臨んで詔を稱し」（『宋史』卷四七瀛國公紀）た謝太后と見たい。「重光」は日月の二重の輝きの意と、後王が前王の功德を嗣ぐという意とを併わせもつ。「書經」顧命に「昔君王武王、宣重光」とある。「天與子」は、天意によって帝位が繼承されることを説く『孟子』萬章上の「天與賢則與賢、天與子則與子」を用いたものである。

(15) 『爾雅』釋天・月名に「七月爲相」とある。寡聞にして「相霖」の用例を知らないが、恭帝即位の七月と合致するので、一應このように解しておきたい。

(16) 立之の隱棲について蕭敏「識水厓公詩集拾遺」は、「宋祚移、關門歸隱、蓋仍今蕭田（江西省贛州地區寧都縣）舊業也」という。ただし退居は王朝交替後が初めてであるとは断定し難い。「漁磯惠詩、適聞王師過邑、次韻作歡喜口號」詩（『蕭水厓詩集拾遺』卷下）に「不是逃名韓伯休、避兵聊欲蔽林丘」とある。「韓伯休」は、名の著われるのを避け、霸陵山中に隱遷した後漢の韓康を指す（『後漢書』卷八二逸民傳）。また「同是人間七十餘」と詠じ起こす「寄羅洞谷」詩（同）には、「□去避兵長禱食、邇來古地且巢居」とある。いずれも戦亂を避けての隱棲を仄めかしている。

(17) ちなみに錢鍾書『宋詩選註』（一九五八年第一版、八九年第二版、人文學出版社）は立之詩五首を收め、小傳に「蕭立之（生年死年不詳）一名立等、字斯立、自號冰崖、寧都人、有『蕭冰崖詩集拾遺』。這位有堅強的民族氣節的詩人沒有同時的謝翺、眞山民等那些遺民來得著名、可是在藝術上超過了他們的造詣。南宋危急的時候、他參預過保衛本朝的戰爭；南宋亡後、他對元代的統治極端憎惡。……」（第二版に據る）と記

し、高い評價を與えている。

(18) 『後漢書』卷二四馬援傳に「援曰、方今匈奴、烏桓尙擾北邊、欲自請擊之、男兒要當死於邊野、以馬革裹屍還葬耳、何能臥牀上在兒女子手中邪」とある。

(19) 蕭敏「識水厓公詩集拾遺」に立之の三子に關し、「公三子、長諱士贊、次諱士賢、註李太白詩、有庸言集、亦不傳、又次諱士賢、皆與草廬吳先生友善」と記す。なお「吳先生」とは吳澄（『元史』卷一七一）のこと、彼は士賢の「庸言」に序している（『蕭水厓詩集拾遺』附「蕭粹齋庸言序」）。それには「予於韻蕭君粹可、交遊二十載」とある。

(20) 篇末の蕭注の後半に、「詩意蓋謂眞儒不遇於世、而假儒衣冠者、反得位而哂笑焉、眞儒之心、其煩憂從可知矣、此乃太白譏世之作也、雖然何世而不如此哉、千載讀之、猶有感激（「雖然何世」以下、玉本刪。郭本無蕭注）」とある。

(21) この詩の蕭注の後半に、「此篇險賢者蒙朝廷養育之恩、有才而不見用、空受此恩也、當可用之時、而君不採之、惟有飄零老死而已、將安所依乎、是可嘆也（末四字、玉本刪。郭本不刪）」とある。

(22) 管見の及んだ地志としては、『大明一統志』卷五八贛州府・『嘉慶重修一統志』卷三三三寧都直隸州・『嘉靖江西通志』卷三五贛州府・清修『江西通志』卷一六九寧都州・『天啓贛州府志』卷一六鄉賢志文學に士賢の小傳が收められている。そのうち『天啓贛州府志』が最も詳しく、「蕭士賢、字粹可、立等仲子、自幼篤學工詩、不求聞達、與吳文正公（吳澄）友善、恆稱其觀書、如法吏精明、情僞立判、搜抉微旨、毫髮畢露（據吳澄「蕭粹齋庸言序」）、著有詩評二十餘篇（即「庸言」）、尤愛李太白詩、反復吟誦、爲分類補註、行於世」とある。むろん蕭敏「識水厓公詩集拾遺」の士賢に言及した部分にも、「入元隱居不出」に相當する言葉はない。あるいは王琦は、蕭敏が立之について「宋旂移、闔門歸隱」としているのを、士賢のことに混同したのであろうか。なお、上記『嘉慶重修一統

志』及び明・清兩種の『江西通志』は、誤って『水厓集』を士賢の撰とする。

(23) 蕭士賢には本書の他に「庸言」という著述があったが、早くに佚してしまつた。ただ吳澄の序のみ傳存し、それに「有評詩廿餘篇條、曰粹齋庸言」と記されているので、「庸言」は詩話の類であつたようである。注(19)参照。